Osaka University Knowledge Archive

Title	座談会　わたしたちの将来 ： 次世代に向けて発信していくこと
Author(s)	石川, 朝子
Citation	GLOCOLブックレット. 2012, 8, p. 16-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48318
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

Ⅰ
お互いの経験を聴こう・話そう
ミニ座談会

座談会
わたしたちの将来：次世代に向けて発信していくこと

石川朝子　大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程

【開催日時・場所】

2011年1月29日（土）
　　座談会 10：00 ～ 12：00
　　全体共有 12：00 ～ 12：20
大阪大学豊中キャンパス
大学教育実践センター教育研究棟Ⅰ（2階）
セミナー室1

【座談会のねらい】

本座談会は、来日してからの経験を参加者全員で語り合う場として設けられた。ここでは、学校のこと、勉強のこと、語学のこと、友達のこと、家族のこと、進学や将来について用意されたトピックについて自由に話をしてもらうこととした。話のなかに出てきた内容から、○○（たとえば学校、地域など）がこうなればいいなといった提言がでてくることを目指して、本座談会を設定した。東京・大阪・滋賀・兵庫など多くの異なる地域で生活した経験をお話しいただき、知り合うことでネットワークをつくるきっかけになればと考えた。

【参加者属性】

参加者属性は以下の通り。トランスナショナルな背景をもつ参加者が合計10人。高校生1名（パラグアイ）、専門学校生1名（中国）、大学生5名（内ペルー4名、中国1名）、幼稚園教員1名（中国）、その他2名（中国、ブラジル）。なかには、祖母が残留婦人であるため、10歳のときに来日した経歴をもつ参加者や、9歳までペルーの日本人学校に通っていたという参加者、11歳のとき家族で生活をするためにペルーから来日したという参加者、小学校のとき中国から来日したという参加者など、それぞれ異なる背景をもっている方々と共に、座談会を開くことができた。

【座談会の内容】

2時間にわたって、それぞれの経験が語られた。すべてを文字で残すことは難しいが、できる限りディスカッションに忠実に、キーワードを中心として紹介していこうと思う。
（ワークショップの進め方や話し合ったテーマについては、別項の「ワークショップのヒント」（p.22）を参照のこと）

話をしていくなかで出てきたキーワード「国籍のこと」「自分らしく生きる」「次世代の子どもを育む」「子どもたちに自信をもってほしい」の四つについて簡単に内容をまとめることとする。

【国籍のこと】

まず、「将来」というテーマで話を始めた。「将来」と聞いて思うことをそれぞれ話してもらうことにした。そこで話された内容は、「自分の国籍」のことであった。

「自分の国籍」に関しては、将来日本国籍を取得するかどうかについて議論された。すでに日本国籍を取得した参加者からは、日本国籍を取得して日本名になったけれど、裁判所にいって日本国籍を保持したまま民族名にしたというエピソードが話された。彼女の意見

写真1　付箋を使っての自己紹介

としては、「自分は中国人。国籍は便利かどうかで取得を考えた。中国人ということは自分が知っていたら十分だ」という考えが出ました。このことについて、参加者のそれぞれの意見は以下のとおりである。

・現在24歳だが、国籍を変えるか変えないかずっと悩んできた。名前も捨てたくない。すごく宙ぶらりんな状態が嫌。いろいろめんどうくさいことがある。
・自分としてはペルー人としての意識を持っている。しかし、ペルー人の血をひいていない。生まれ育った場所で考えるのか、血縁で考えるのかどちらを選ぶかで悩む。
・帰化するかしないか。親は反対。結婚のことも考えて。

また、この話の延長線上に、自らのアイデンティティに関する思いが語られていった。たとえば、

・初めて会った人などに、自分のことを何度も何度も説明しなければいけない。説明するのは難しいし、説明しても分かってもらいにくい。
・顔は外国人。俺は何人？
・血って何？すべて混ざり合っているのが私たちでは？
・向こうにいったらめっちゃ言われる。こっちに来たら名前に引っかかる。
・中途半端に思えた。自信がつくと考え方が変化した。自分の経験を伝えたい。
・自分の居場所はどこ？

など、さまざまな考え方を共有することができた。話のなかで、いくつかキーワードが出てきた。それらは、「世界人という言葉が好き」「ハーフではなくダブル」である。世界人というのは、一つの国に属していない自分というものを表現したことばであり、ダブルは「半分」ではなく二つないしは、たくさんの文化を持つ自分を肯定的にとらえている考えを表した言葉として表現された。

【自分らしく生きる】

では、自分らしく生きるとはどういうことなのか。かのじょ・かれらが話した内容を一部お伝えする。

かのじょ・かれらはまず自分のことを知ってもらうことが大切だと話した。ある参加者は、メディアの影響の大きさを話したあと、日本に住む外国にルーツをもつ人たちがTVに出ることの必要性について話した。そして身近な人とのコミュニケーションのなかで、自らの経験などを話す機会をもつこと、そして自分の育った文化・言葉を伝えていくことが必要なのではないかと話す。

「自分らしく生きること」に気づかされた経験をもつ参加者がたくさんいた。そのなかで

一番多かったのが「出会い」の重要性であった。ある参加者は、友人に出会い、先生に出会い、留学先で自分のルーツと思えることに出会い、自分のライフヒストリーを演じる劇に出会った。出会いによって、自分が自分らしく生きることができるきっかけを掴んだようだった。それは、「自分って何やろ？ 20歳の時、自分は自分や！と自覚した」という参加者の一言で言い表されているように思われる。

【次世代の子どもを育む】

自分の国籍のことについて話を進めていたが、ある参加者の「もう親の立場になって考える歳になった。自分の子どものことを考えたら不安になる」、「日本で子どもを産むとしたらどうする？子どもの国籍はどうするの？」という発言から、次世代の子どもを育むというテーマへと移っていった。

【子どもたちに自信をもってほしい】

「ここに今日集まった人たちは、こんな風に話すことができる。どのようにすれば、次の世代が私たちのように語る言葉を持ったり、自信を持つようになるのだろうか？」

このことに関しては、次のようにたくさんの意見が出た。

・自分から発信してほしい。周囲の人も発信してほしい。
・自分から発信したい！発信できる場所を！
・自分はこうやったらいいと自ら行動できる人に育てるべき。
・国と国の関係が生活に影響してくる。そんな時、真っすぐ生きてほしい。
・気づきが重要！
・周りが自分をどう見るかではなく、自分がまわりをどう見るか。
・二つの文化をもって、パラグアイで国際結婚は羨ましいこと。
・母から二つの文化を持つことは誇りだと言われ、羨ましく思った。
・子どもに考えさせることが大事。

今回、「将来」というテーマについて話し始めたのだが、自らの経験を話すなかで、これから日本で育っていくトランスナショナルな子どもたちへ、自分たちの経験をどう伝えていくのかというテーマへと変わっていった。そして、同じ背景をもつ子どもたちにこれからも自分たちの経験を「発信していきたい」ということで参加者の気持ちが一致した。自分たちが自らを語る言葉をもてたのは自分に信が持てたからだと語る参加者たちは、今後、同じ背景をもつ子どもたちと一緒にアクションを起こしていくだろう。

【座談会が終わって：参加者の感想】

✲今日は参加して、私の結論は、国籍を超えてひとを同じ人間としてみることは大事だと思いました。自分の国籍で迷っているひともいっぱいいると思います。日系人であっても、外国生まれ日本育ちの自分は何なのかと悩んでいる人もいっぱいいると思います。「ペルー人」とか「ブラジル人」という

「何々人」ではなくて「世界人」という言葉を伝えたいです。

✲今、私たちがこうやって思っているのは、子どものころにいろいろな経験があって、その過程でいろんなところで経験を経て視野が広がってきて、いまこうやって語ることができると思います。おそらく教育関係者であったりそういう子どもと携わっている今のここにいる方々に関しては、子どもそれぞれで、内気な子だったり積極的な子もいるので、それぞれの子どもにあった、その子ども自身が今後自分で視野を広げられて、いろいろな経験ができるように話し方にも気を付けてほしいと思います。先生という存在はものすごく大きいので、親や、ボランティアの誰か存在がいたりすると、自信を持って行けると思います。私たちもこれからも活動していったりすると思いますので、どうぞよろしくお願いします。

✲今、私は愛知県の保育園で勤務しています。今日は「世界人」と「ダブル」という言葉に対してすごく強い印象をもちました。ハーフではなくて、ダブルというプラスの見方をすることで、全然見え方も違ってくるのだなと思いました。私が今勤務している保育園にも外国の子どもがいます。特にどこの国の人かまだわからないのですが、「何々人」、外国人だからという見方ではなくて、個人の「何々ちゃん」としてみるように心がけています。

写真２　教育経験について語る参加者

✲こういう場がほんとに久しぶりだったので、うきうきワクワクしてしまって、この場での取り決めみたいなのを作ってくださって、ここは安全な場であるということを意思表示してくださったので、そのことについてはすごく感謝をしています。ほかの方の体験を聴いているうちに、そうだな、そうだな、とどれも自分にあてはまることだなと思っていたのですけれども、そう思っているうちに、さしはさむ余地がなくなってしまって、最後までほとんどコメントを出すことができませんでした。終わりの方に、子どもの自尊心をはぐくむために、自信を持たせるためにはという方向性を示してくださったので、私自身が自信や自尊心を持てたかなというポイントを言って終わりたいと思います。それは、出会いが大きいかなと思っています。一つ目として大学の先生との出会いが当てはまるかなと思っています。その先生によって「あなたは尊重される存在なんだ」と「あなたは才能があるんだと」、プラスの言葉の雨嵐くらいのものでもって包んでくれる人と出会いました。もう一つは、自分のルーツとの出会いがあるかなと思っています。私の場合、残留婦人三世ですので、自分の祖母のつながりがあって自

分が今ここ日本にいるということ、歴史の教科書をみても、自分のつながりがそこにあるということ。それを確認したときのゆるぎない自分の場というものが大きいかなと思っていますし、それをまた絶え間なく学んでいくことによって、もっともっと揺るぎないものになっていっているかなと思います。三つ目は、今のこういった場のように、同じ立場の人に出会う。私が一番初めにそういう人と出会ったなと感じたのは、それも大学のときで、在日の方だったのですけれども、本名を名乗って、中高から自信をもって生きてきた方、あるいは、今まさに、本名を今名乗ろう、今まさに変わろうとしているという方、今も自分の民族的な部分については隠している方。いろんな方に出会ったことで、じゃ、自分は本当にこの社会のなかでどうやって生きていかなければいけないのだということを突き付けられて、ほんとにちょっとずついろんな方の助けを借りながら来たかなと思っています。今日はありがとうございました。

✲私はこの場でいろいろなテーマについてさまざまな問題とそれぞれあった解決方法をみなさんと一緒に発言することができたのですごくよかったし、私にいろいろ考え方とか価値観とかそういうのをたくさんもらって、私にすごくプラスになったと思います。それで、これを通して自分に、外国人であるということに自信が持てたし、これからも自分たちの持っている文化を身近なひとから伝えていきたいし、私の周りの人たちにも日本の文化とか教えてほしいし、こういう交流とかを経て、どんどん自分も相手とかもお互いに成長していって、こういう差別とかなくなればいいなと思いました。

✲私も今日の話合いという場に参加して、国や年齢も違ったりするのですけれども、やっぱり話をしていると同じような経験をしていたり、同じような考え方を持っていたりして、共感する部分がすごくたくさんあって、話す度にこういう場ってすごくいいなって思いました。このメンバーはみんな自分に自信を持って生きているメンバーだと思うのですけれども、ではこれからの子どもたちがどうしたらこのメンバーみたいに自信を持って生きられるのかというのを常に考えてきました。私はいま3児の子どもを持つ母なのですけれども、その子どもたちがどうしたら自分に自信を持って自分らしく生きていけるのか、というのをこれからも考え続けなければいけない。自分の経験からですが、自分の言葉、自分の国の文化を知るということはすごく大切だと思います。あともっと成長していけば自分のことを話せるこういう場というもののが大事になってくるのではないかなと思います。ぜひそういう場をつくっていただきたいと思っております。

✲5歳のときに日本に来ました。ブラジル人です。いろいろ話を聞いていて、自分の思っていることと、よくみなさんの思っているこ

とがすごくかぶっている。同じような思いで、日本に住んでいるすべての外国人の二世や三世は、日本人にはわからないかもしれないけれど、ブラジル人とペルー人は国籍が違うのに、日本に住んでいるだけで同じような気持ちになるというか、そんな感じを思いました。去年の12月に妹が生まれたので、これから日本の外国人に対する態度がよくなっていったらいいなと思います。

✲出身はペルーです。ちょっと疑問に思うのは、なぜ日本に日系人の人たちが病院であったりそういう場所で働いてないのだろう、このいまの構造はなぜそうなっているのだろうかという疑問をもっています。午後のワークショップで目一杯話したいと思います。

✲今日は途中からの参加でしたけど、ほんとにみなさんととっても話が弾みました。すごく楽しかったです。そのなかでも一番印象に残ったのは、みなさんがおっしゃっていた国籍は関係ないのだということでした。一人の外国人が悪いことをしたからといって、すべての外国人がそうだというわけではないので、もっとこう固定観念とかそういうものを捨てて一人ひとり人間として接していくことが大切かなと改めて思いました。すごく楽しかったです。ありがとうございました。

ファシリテーターとして感じたこと

今回の座談会では、自分の経験を語りながらも、次の世代をどうしていくかということについて、参加者が真剣に意見を交わしあったというところが印象的でした。全員で話をしていくなかで、自分の考えと重なる意見が出た時にも頷きながら聞いている参加者もいました。違う意見が出たときもその多様性を受け入れながら、建設的に議論を進めていくことができる雰囲気が生まれていると感じました。みなさんに安心してディスカッションをお任せすることができたので、ファシリテーターとしては特別何かをしたというわけではありません。短い時間でしたが、お互いに安心感と信頼感を築くことができたことをうれしく思います。

自らの経験を語ることは容易なことではありません。このような場で話すことが、かのじょ・かれらにとってどのような意味を持っているのか、かのじょ・かれらそして、このブックレットをお読みの方々の将来とどのようにつながっていくのかなど、考えなければならないことがたくさんあります。この報告書を書かせていただくにあたって、このことは再度考え直した部分でした。「いつも説明をさせられるのは、かのじょ・かれら」という構図から脱却し、どのようにすれば社会を構成する全ての人々で、多様で豊かな世界を築いていけるか。どのようにその方向へ持っていくことができるのか、座談会を通して今後の課題を再度確認することができました。これからこの方向へ向かって、かのじょ・かれらと共にアクションを起こしていきたい、と感じた2時間の座談会でした。